愛知淑徳大学論集　―心理学部篇―　第２号　2012　93－105

ひきこもる青年期事例の心理査定と心理療法

－アスペルガー障害を心配した対人恐怖の二事例－

米 倉 五 郎

Assessment and psychotherapy of withdrawal cases in adolescent age
－ Two Taijin-kyofu's cases who were afraid of being Asperger's disorder －

Goro Yonekura

要旨

本論では青年期においてひきこもり状態を示した事例の中で，「自分がアスペルガー障害であるに違いない」と思い込んできた対人恐怖症と抑うつ症を重ねもった男女の二事例について検討し考察する。心理査定と心理療法とともに精神科医による診断と治療との連携により，両事例は半年から１年間ほどで心理面接の終結を迎え，大学生として健康な生活を送った。

両事例は思春期から対人関係での不適応感である対人恐怖や視線恐怖をアスペルガー障害のためと思い悩んでいた。筆者は心理査定および心理療法の過程で，両者はアスペルガー障害ではなく対人恐怖と社交恐怖と見立て直した。また両事例に共通する主題は，乳幼児期における母子関係での愛着関係の脆弱さと，母親からの厳しい叱責や無視等による心的トラウマによる自己評価と自尊心の低さに基づく自我同一性の拡散が認められたが，面接終結時には青年として健全な自我同一性を獲得した。

キー・ワード：ひきこもり，対人恐怖，社交恐怖，アスペルガー障害

Ⅰ　はじめに

近年，大学生のメンタルヘルスの悪化による対人関係での不適応や休学，留年などを示してひきこもり状態に陥る青年が増えている。一口にひきこもりといっても，そのメンタルヘルスの実態は所謂ひきこもり症候群とも言い得るほどさまざまな人格と病態が該当している。これまで筆者はひきこもりを示した青年期の事例についての心理査定法と心理療法について報告した「対話心理療法と心理査定法との統合的アプローチ」（米倉；2005），「青年期におけるひきこもりと自我同一性の拡散」（中田・米倉）。

本稿では，ひきこもり状態を呈した事例群の中で，自ら「アスペルガー障害ではないか」と思い悩んでいたパーソナリティ障害（強迫傾向）および精神疾患である気分障害（抑うつ状態）と不安障害（対人恐怖・社交不安）を示した男女二事例を報告し，その心理査定と心理療法の過程を報告し検討する。なお精神医学的な診断および治療は専門医と連携し確認し，二事例とも６～10カ月間で軽快し心理面接を終結した。

Ⅱ　方　　法

筆者が心理療法と心理査定法を精神科医の治療と連携して担当した青年期の男女二事例（Ａ男・Ｂ子）の心理査定と面接過程を検討する。両事例はともに「自分がアスペルガー障害ではないか」と思い悩んでいた。

なお，事例の記述ではプライバシー保護のため事例概要および面接経過の内容に修正を加えた。以下の文章ではクライアントをCl，セラピストをThとして省略して表記し，またクライエントの発言は＜＞，セラピストの発言は「」により示した。

Ⅲ　事　　例

事例１：Ａ郎　男性　大学生

主訴：ひきこもりと留年，自分はアスペルガー障害ではないか，対人恐怖

生育歴と事例概要：乳幼児期に特記すべき既往歴はない。しかし幼児期から母親のＡ郎への養育は厳しくよく叩いた。小学校５年生の頃から特に母親は長男であるＡ郎をよく叱り一人で就眠するようしつけた。幼稚園や小学校では交友関係をもち仲良しの親友もいたが，中学校から徐々に対人関係での不適応感を感じ始め，当時から「自分が嫌われるのはアスペルガーだからではないか」と悩み始めた。高校進学では志望校の受験に失敗しＡは「浪人したい」と希望したが，親が何とか説き伏せ別の高校へ入学した。高校の通学途中で志望校だった生徒と顔を合わせたくないという理由で遠路を自転車通学した。卒業式では人から顔を背けるように避けていた姿を母親は記憶していた。

大学入学後，下宿生活を始め１年生の前期のみ授業に出席し単位を取得した。後期からは下宿にひきこもり昼夜逆転の生活となり不登校となった。その後Ｘ年２月に来談し面接相談が開始するまでの１年半の間は孤立化したひきこもり生活を送った。ただ夏休みで帰省中は自室のパソコンに向かって過ごした。ただ母親が寛いでいるといつの間にか寄り添って来て母親に本人に体や衣服の一部を掴んで貰いたがったと母親は回想した。当時は「将来，何をしたらよいのか見つからない」と焦っていた。Ｘ年２月からＡは学生課から勧められて来所した。Ｘ年２月から１～２週間に１回の心理療法が開始されるとともに，精神科医による診断（対人恐怖・社交不安・抑鬱状態）と治療（抗うつ薬投与等）との連携がなされた。計16回の心理面接（約６カ月間）の経過で，抑鬱状態・対人恐怖・社交不安によるひきこもりは軽快し心身ともに健康を回復し復学した。以下に面接経過を報告し若干の考察をする。

面接経過（Ｘ年２月～10月　計17回）

第１回

Ｘ－２年10月から約１年半にわたり下宿にひきこもり大学も不登校をなった。他人と会うことが苦痛で下宿からの外出を極力減らした。幼稚園・小学校・中学校までは交友関係をもったが，高校入学後にアスペルガーといわれるクラスメートと自分とが，「人の気持ちがわからない」・「場の雰囲気がわからない」という特徴で似ているから，人からうっとうしがられ嫌われると思った。

第２回

幼稚園から高校時代まで不登校はなくいじめを受けた体験もない。中学校の２年生頃から友人関係が成長し変化したが，自分だけは自己中心的な発言をして徐々に対人関係での不適応に悩み始めた。当時からすでに他人との心理的距離がわからず孤立化して自分がアスペルガーではないかと思い始めた。一方他人から見られることが苦痛である対人恐怖や視線恐怖があることも確認された。最近抗うつ薬を服薬後に抑うつ気分は少し楽になり昼夜逆転の生活も改善された。

第３回

高校１年生まで親友や友人は数人いたが，高校２年生からクラスが別になり孤独となった。宿題とした描画法（人物画法・図１，風景構成法・図２）やＳＣＴ（文章完成法・表１）の結果から，つよい自己不全不安および強迫的な完全主義をもつ萎縮した自己像と自我同一性の拡散を推察された。

第４回

Clは「まだアスペルガーかと心配だ」というので，Thは＜アスペルガー障害ではないので今後，対人関係をもっていけるといいね＞と助言したら安心したかのように「はい」と応えた。しかし今なお自殺願望を抱いていた。他人の存在そのものがＡ郎にとり威圧してくるものであり，この対人恐怖はすでに中学校１～２年生からつよくなった。しかし中学校ではハンドボール部に所属した健康

な生活を送っていた。この時に風景構成法を施行したが，全体の構成力はゆるいが明るいイメージであった。ＴＥＧ（エゴグラム）を次回までとして渡した。

第５回

先日，両親は主治医の先生からＡ郎の状態はアスペルガー障害ではなく抑うつ状態や対人恐怖との説明を聴き納得した。まだ人の視線が気になり苦になるため校内に入り辛いが，抑うつ感は半分に減少した。ＴＥＧの結果はＦＣ低位・ＡＣ高位型であり，他者への過剰な気づかいとともに過度な自己抑制の傾向，Ａの高位型から合理的，論理的で健康な自分は保持していることを説明した。

第６回

春休みのため三週間ぶりの面接であった。復学希望はあっても，まだ学生課へ行けない。しかし大学以外のスーパー店には対人不安もなく行ける。病気が治れば普通の大学生活を送りたいと希望する。

第７回

以前からあったアトピー性皮膚炎が最近軽快してきた。前期の科目履修の相談のため教務課へ行ったが，その後は下宿にひきこもり履修手続きはできない。

第８回

復学のため履修登録をしようと努力したが,大勢の学生がいる教室の中へ入るのは緊張し不安だという。授業に出席できる可能性は30〜40％と応えた。

第９回

一人で単位履修のため教務課へ行くのは不安だというため，相談室のスタッフに同伴していただくことを同意する。その後体調不良との理由で面接が二回キャンセルとなる。

第10回

三週間ぶりの面接となったが，Ａ郎はすっきりと散髪し血色も良好で体重も増え元気そうであった。散髪は帰郷して親にしてもらったという。所謂新規まき直しの心境に到達したようであった。結局,復学は後期からにすることを決心した。そして強迫的な完全主義の傾向について述べた。つまり新しいことを始める際に目標が高く何事も「石橋を叩かなければ渡れない」ために二の足を踏んでしまい，ちょっとした失敗で挫折していた。この時点でThからは＜不安観念は浮かばせて，取りあえずは行動し練習してみましょう＞と認知行動療法の反応妨害法やイメージ法を応用した助言をしていた。

第11回

この頃から服薬をしなくなったという。しかし気分の起伏や抑うつ感は減少していた。また就寝と起床時間も規則正しい生活が続いていた。

第12回

下宿でのひきこもり生活は続いていたので，大学の図書館や病院のデイケアーへの通所を勧めた。

第13回

アトピー性皮膚炎が軽快しひきこもり生活から自発的にアルバイトを始めた。

第14回

生活に大きな変化はないが，実家へ帰郷して両親との関係と連絡を深めていた。夏休み前に両親との合同面接を希望し１週間後に行う予約をした。

第15回

父母とＡ郎との合同面接を行った。父母はＡ郎について，「高校受験で失敗したので，私達（父母）が別の高校入学を無理やり勧めた。本人は浪人希望でしたが，徐々に劣等感を抱き遠路の通学を自転車でした。乳幼児期から中学校までは多くの友人もいたし家族ぐるみでスキーへも行き問題はなく成長した」と述べた。Thは＜今後，後期から大学へ復学できるといい。実家で戻ったら旧友との付き合いを回復するといい。ご両親は本人を叱責するよりも自分に自信をもてるように励ましてほしい。またアスペルガーではなく，これまでの対人恐怖・視線恐怖・抑うつも相当に回復している＞と助言した。父母とＡ郎は安心し納得できた表情でThの助言を聴いていた。

第16回

約３カ月後，夏休みが終わり後期を迎えた。Ａ郎の表情は明るく服装も若者らしくなり清潔となった。＜その後どうですか＞と尋ねると「今は下宿の外へ出る時も気持ちを楽にしようと思うようになった」＜それはよい工夫，きっかけは＞「きっかけがあり，それは身内の伯父さんで昔から人の

評価を苦にしない人で憧れていた。これまで自分は人の眼ばかり苦にしていた」＜３カ月間，元気そうだけど気持ちの変化はある＞「以前は完全主義的に完全かゼロかという考えだった。下宿の中と外かという完全主義的で極端な考えではなく，余裕をもった考え方でなるべくなだらかに移行していくのがいい」。後期では７科目を履修しすでに授業に出席し，あるクラブ活動にも入部し同級生が歓迎してくれたことを喜んでいた。今後の生活はその都度，出たところ勝負でいきたいと明るい表情で快活に述べた。こうしてＡ郎は大学生活に元気になり復学し再スタートした。

その後の面接予約はＡ郎のオンデマンドとして面接終結となった。

面接過程のまとめ：

Ａ郎は乳幼児の分離個体期から母親にかなり厳しい養育を受けていった。母親との十分な愛着形成は不十分なままに，思春期である中学校および高校生時代を迎えた。第二の分離個体期となる思春期において，Ａ郎は他人関係での成長変化の過程で不適応に陥った。すなわち児童期までの自己中心的な対人関係ではなくチャムシップという脱自己中心的な友人関係の中で自分だけが自己愛的で自己中心的な言動に固着していることを気付き劣等感を覚え始めた。さらに高校入試での失敗体験と両親（母親）からの強制による志望校ではない高校への入学は心的トラウマにもなった。こうした過程の中からＡ郎は自分は「アスペルガーに違いない」という思い込みをもつようになった。その結果，面接初期に施行された人物画（図１）や風景構成法（図２）からは萎縮し低い自己評価や対人関係からのひきこもりが推察され，ＳＣＴ・文章完成法（表１）の結果はほとんどが書かれていない余白の多いことから，自己表現への不安や消極性，低い自己評価などの包含する抑うつ状態と自我同一性の拡散が判定された。その後の面接および精神医学的な診断との照合の過程で，アスペルガー障害ではなく対人恐怖・社交不安であるこという心理アセスメントをフィードバックすると，Ａ郎は安心感を抱き将来への希望を抱くようになり，強迫的な完全主義について内省し洞察し生活は改善し，心理療法は終結した。

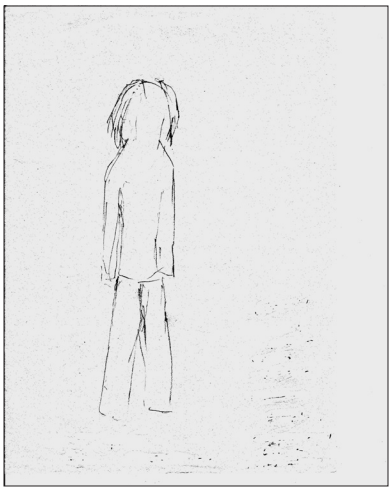

図１　Ａ郎の人物画法

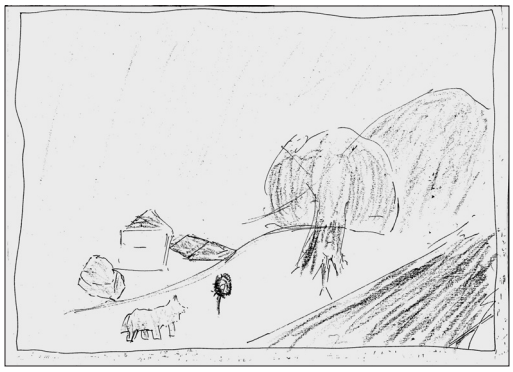

図２　Ａ郎の風景構成法

表１　Ａ郎のＳＣＴ（文章完成法）のプロトコル

		項目番号	刺　激　文	反　応　内　容
自己概念	過去の自己	Ⅰ－１ Ⅰ－28 Ⅰ－30 Ⅱ－30	子供の頃、私は 今までは 私が思い出すのは 私が忘れられないのは	

自己概念	現在の自己の現状・理解	Ⅰ－6 Ⅰ－8 Ⅰ－10 Ⅰ－11 Ⅰ－19 Ⅰ－22 Ⅰ－23 Ⅱ－4 Ⅱ－14 Ⅱ－17 Ⅱ－19 Ⅱ－21 Ⅱ－22 Ⅱ－24 Ⅱ－27 Ⅱ－29	私が得意になるのは 私が知りたいことは 私がきらいなのは 私の服 私がひそかに 時々私は 私が心をひかれるのは 私はよく 私が好きなのは 私の野心 私の気持ち 私が残念なのは 大部分の時間を 調子の良い時 私が羨ましいのは 私が努力しているのは	周りが変わること
	身体的自己	Ⅰ－27 Ⅱ－9 Ⅱ－15 Ⅱ－20	私の顔 私の眠り 私の頭脳（あたま） 私の健康	
	否定的自己	Ⅰ－4 Ⅰ－14 Ⅰ－24 Ⅱ－2 Ⅱ－25	私の失敗 私の出来ないことは 私の不平は 私を不安にするのは どうしても私は	
	自己の可能性	Ⅱ－5 Ⅱ－7	もし私が もう一度やり直せるなら	
	未来の自己	Ⅱ－28	年をとった時	
家族関係	家庭	Ⅰ－5 Ⅰ－3 Ⅱ－1 Ⅱ－26	家の人は私を 家の暮し 家では 家の人は	甘やかす は豊か 一人
	父	Ⅰ－9 Ⅱ－12	私の父 もし私の父が	
	母	Ⅰ－17 Ⅱ－6	もし私の母が 私の母	
	同胞	Ⅰ－25	私の兄弟（姉妹）	
対人関係	他人から見た自己	Ⅰ－2	私はよく人から	
	対人交流	Ⅰ－13 Ⅰ－20 Ⅰ－26 Ⅱ－10 Ⅱ－11 Ⅱ－23	人々 世の中 職場では 学校では 恋愛 結婚	金
	対友人	Ⅱ－3	友達	はいない

実存的価値	争い	Ⅰ－7	争い	
	死	Ⅰ－12 Ⅱ－13	死 自殺	
	生活	Ⅰ－15 Ⅰ－18	運動 仕事	は苦手
	家族	Ⅰ－21 Ⅱ－18	夫 妻	
	性	Ⅰ－29 Ⅱ－8	女 男	
	将来	Ⅰ－16	将来	
	金	Ⅱ－16	金	

事例２：Ｂ子　女性　大学生

主訴：人ごみが怖い。大きな音が怖くパニックになる。対人関係がスムーズにいかないのでアスペルガー障害ではないかと心配する。

生育歴と事例概要：乳幼児期に特記すべき既往歴はない。三歳児検診では問題はなかった。元来から母親はヒステリックによく怒る人で，幼児期には時々憤怒した母親がＢ子を部屋に閉じ込めるお仕置きを受けた。これまで母親を怒らせないように対応してきた。また母親は妹を可愛がりＢ子を無視する姉妹間での心理的差別もあった。思春期の頃から母親から叱責されるとパニックとなり頭は真っ白になる時がよくあった。Ｂ子は幼稚園・小学校・中学校時代には運動が下手で無口で勉強だけはできたが，いじめを受けていた。高校ではいじめから逃げていたという。

大学入学後，通学で乗車するラッシュ時の地下鉄や列車での対人恐怖や人見知りからの吃音，初対面の人と視線を合わせ辛く，場の雰囲気を読めないことから自分はアスペルガー障害であろうと思った。Ｘ年４月に相談室に自ら相談を希望して来談した。その後精神科医との連携により計20回の心理面接（約一年間）の経過で，アスペルガー障害は否定され抑鬱状態や対人恐怖・社交不安，および強迫観念も軽快し健康を回復し，より意欲的に大学生活と対人関係への柔軟な適応力を高めた。

面接経過（Ｘ年５月～Ｘ＋１年３月　計20回）

第１回

大学への通学や受講はできているが，地下鉄に乗車中に大きな騒音を聴くとパニック様に不安恐怖となり困る。また花火大会へ行った時も花火が爆発する騒音でパニックになり頭痛が激しくなり涙が出てしまった。突然の騒音を聴くと人が怒っているのかと苦になる。他人が無表情だと怒り不機嫌かと気になり頭が真っ白になり身体と上肢が震えてくる。この初回面接でClはThとの目線の合わせをほとんど避け，対人関係の対話に相当に緊張する様子であった。

第２回

この面接から２年前から付き合ってきた元彼氏とのストレスを繰りかし相談していった。その元彼氏はＢ子をわがままに振り回す自己愛的で自己中心的な人物であったが，Ｂ子はあたかも母親代理者のように元彼氏と付き合い世話役をしてきた。しかし面接では徐々に元彼氏に対する不満を語るようになり，元彼氏の存在が恋人なのか友人なのかはっきりしないと言い，曖昧な関係を仕切り直す相談をしていった。

第３回

元彼氏は気に食わないことがあると「皿を投げたい，疲れた，どこか遠くへ行きたい」と愚痴をこぼす。Clは「自分は鍵を掛けたか，忘れ物はないか，外出する時に戸締りを何回となく確認する」という強迫的な確認癖があるというので，Thは「そうした雑念や観念は浮かばして，イメージした箱や壺に入れて，取りあえず行動をするようにしてください」助言した。当時から薬物療法の効果もあってか通学途中での対人恐怖は減少しパニッ

クにならなくなった。またClとThとの対話はスムーズに展開し吃音もなくなった。目線の合わせも多くなりより自然になり，強迫的な観念を抱き易い対人恐怖や社交不安でありアスペルガー障害でなないと見立てられた。

第４回

電車や地下鉄の中でもパニックになることは減り，両親が不機嫌そうにしていても焦らなくなった。また寝付きも改善していき，心身の緊張が全体的に弛緩してきた。元彼氏の存在は，これまでＢ子がパニックに陥った時に頼り甘えて来たが，最近はそうした状態が減り元彼氏の方が一方的に退行し依存的だと理解された。

第５回

小学校や中学校時代に自分を嫌っていた男子生徒の数人からいじめられていたことを打ち明けた。過去において受けた心的トラウマについて述べ始めていった。

第６回

以前から父親は母親に仕事でのストレスを八つ当たりして「母親には能力がない」とか「一所懸命に働いて何が悪いのか」とキレたためＢ子もパニックになってしまっていた。しかし最近は肩こりは減り対人関係での不安も減少した。

第７回

最近は電車のなかでも居眠りできる。たとえ隣りの小母さんさんがギャーと叫んでもパニックにならなくなった。趣味の手芸をし始めたら気が紛れていいという。

第８回

趣味ではデザインや絵画・陶芸が好きで造形を楽しみ始めた。母親は元来家事（掃除・料理）を好まないが，海外旅行などを好む行動派でしばしば車の事故を起こしたりしたが，Ｂ子が情緒不安定な母親を心配し支援していた。当時からＢ子はより柔和な表情をなり薄い化粧もして毛髪も整ってきた。

第９回

これまで付き合った元彼氏とは時々会うが，以前ほど巻き込まれなくなった。大学生活も順調に出席できており，同性の友人関係もできつつあった。樹木画法（図３）を施行したが，Ｂ子の描画からは心理的エネルギーは豊かではあるが，完全主義傾向を推察された。次回まで課題としてＳＣＴ（文章完成法・表３，４）を渡した。レース編みを楽しみ始めた。

第10回

これまでは我慢ばかりしたが，最近では立腹することが多くなった。特に別れた元彼氏への不満を多く語った。ＳＣＴでは「場の空気がよめないと馬鹿にされる」と書いた体験について面談した。また子供のころから「とまどうことが多く」・「変わっている人だといわれた」をいう内容について対話した。これまでＢ子は自分がアスペルガー障害ではないかと心配してきたが，むしろ対人関係での緊張や不安という強い人見知りによるひきこもり状態であったと推測された。

第11回

今まで自分の本音や裏にもっている感情を表現できなかったが，本音と建前，表と裏という感情の両価性について面談の主題になった。Th＜表と裏をもてるのは健康で常識があること＞と解釈すると，Ｂ子は納得し「ありがとうございました」といった。これまでＢ子は家族や元彼氏たち（本音を過剰に表出する人たち）から圧倒されていた。

第12回

会社に就職するより，将来の夢は，対人関係の負担が少ない職業（造形店）を自営してみたいと語る。

第13回

以前から母親にも甘えたり本心で怒れなかった。母親の機嫌が悪いと，母親はヒステリーになり不機嫌となりよく無視された。最近，カウンセリングを受けてから，母親は「私が悪かった」とＢ子に謝った。

第14回

元彼氏から「人に合せれない，場の空気を読めない」と言われたが，最近では大学で同級生の友人が数人できたと元気に語った。

第15回

両親はＢ子の卒業後は大企業に就職を希望していたが，Ｂ子は自分で手作りした造形物を通販する自営業に関心を示した。

第16回

まだ疲れやすく意欲が湧いてこない。母親は妹に甘くＢ子には厳しい姉妹間での心理的な差別（虐待）していたようであった。

第17回

最近，対人関係で余分な気遣いは減った。親友と言える同性の友人も数名とともに行動する。元彼氏だった男性に巻き込まれることも相当なくなり，Ｂ子も元彼氏に対しておびえなくなった。

第18回

昔から母親はあまり家事や料理をしない人で，Ｂ子が整理や料理を担当していた。幼少時からＢ子が上手くできないと母親がよくヒステリックになって怒りだしある部屋に閉じ込められた。元来，母親は情緒不安定でありＢ子は虐待に近い心理的トラウマを受けていた。その不安と恐怖は周囲の騒音によりフラッシュバックしていたのであろう。

第19回

近頃，電車の中や授業中でも居眠りできるようになった。また，自己愛的な母親に振り回されている生活について「母親は他人に気を使い妙に見栄を張るが，もっと家族に気を使ってほしい」とはっきり不満を述べた。

第20回

これまで毎日あった切迫感や強迫観念は減り心の余裕がもてる。対人関係で巻き込まれるストレスは減った。電車や地下鉄でもパニックになる恐怖はなくなり平気で乗車できる。Thが＜これまで自分はアスペルーではないかと心配していたのではないか＞と尋ねると，「以前は心配しましたが，今は大丈夫です」と応え，相談面接の終結を迎えた。

面接過程のまとめ：

Ｂ子もＡ郎と同様に思春期の頃から，対人関係での不適応感や対人恐怖・緊張やパニック的不安を感じやすく，「自分はアスペルガーだろう」と思い込んでいた。しかしＳＣＴ（文章完成法・表２）や面接の過程で元彼氏への不満や怒りを大いに表現し語りつつ，母親からの姉妹間での心理的差別やネグレクト等の虐待的な養育についての不安と怒りも語るようになった。その不安定だった母子関係は面接初期に描画された樹木画（図３）における樹木を支える筈の大きくそり上がった不安定な大地から推察されよう。さらに用紙をはみ出るほど大きな形態の樹木からは強迫的な完全主義傾向も推定された。

またＳＣＴ文章完成法の結果からは，⑴「自己概念」については，あまり自分に自信がなく家族葛藤や学校でのいじめに戸惑っていたが，健全な内省力や資質を窺われた。⑵「家族関係」については，頻発する父母の喧嘩と情緒不安定で多動的な母親と家族関係を耐えて支えてきたいい子としてのＢ子の姿が推察された。おそらく母親が自己愛型人格であり，Ｂ子は母親の自己中心的でヒステリックな養育の中で，低い自己評価と自尊心，対人関係での不安と恐怖・パニック様の体験をもっていたと推察された。⑶「対人関係」については，他人から「変わっている人」と蔑まれた理不尽な評価や自己愛的な元彼氏への怒りと不満を表明した。⑷「実存的価値」については，常識をきちんと踏まえた健全な内省力と個性的な思考力を示している。

その後，Ｂ子は面接の中期や後期で徐々に元彼氏や母親への不満や怒りという陰性的感情や欲動を言語表現していき，対人関係での両価的感情や表と裏の心理過程も理解し受容する過程で，否定的な自己像や自己評価を修正し，図４の第２回樹木画法（枠づけ）に示されたより現実的で個性的な自己像を確立した。そして大学生活の中でも同性の友人関係を楽み，青年期女性として健康な自我同一性を形成していった。

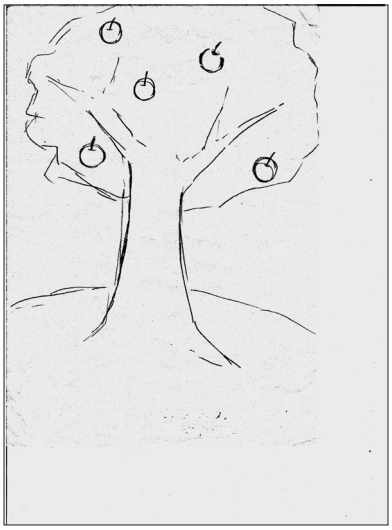

図３　Ｂ子の第１回樹木画法

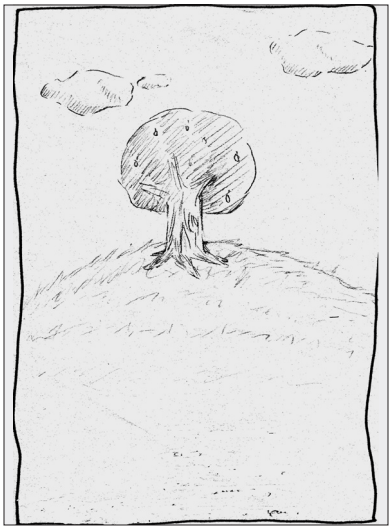

図４　Ｂ子の第２回樹木画法（枠づけ法）

表２　Ｂ子のＳＣＴ（文章完成法）のプロトコル

		項目番号	刺　激　文	反　応　内　容
自己概念	過去の自己	Ⅰ－1	子供の頃、私は	頭の中がいつもぼんやりと曇っていた。とまどうことが多かった気がする。
		Ⅰ－28	今までは	
		Ⅰ－30	私が思い出すのは	２，３歳のころ。夢に出てきた。
		Ⅱ－30	私が忘れられないのは	
	現在の自己の現状・理解	Ⅰ－6	私が得意になるのは	テストで高得点をとった時。
		Ⅰ－8	私が知りたいのは	
		Ⅰ－10	私がきらいなのは	空気が読めないとバカにされること。
		Ⅰ－11	私の服	を作ってみたい。
		Ⅰ－19	私がひそかに	考えているのは，元彼の部屋を大掃除する。
		Ⅰ－22	時々私は	なぜか腹立しくなる。
		Ⅰ－23	私が心をひかれるのは	部屋がきれいで，庭もきれいな暮らし。
		Ⅱ－4	私はよく	「でも」と言ってしまう。あまり良くない気がする。
		Ⅱ－14	私が好きなのは	手芸。
		Ⅱ－17	私の野心	
		Ⅱ－19	私の気持ち	は，自分でも時々わからない。
		Ⅱ－21	私が残念なのは	高校生の時に，したい事をあまりしてない気がすること。
		Ⅱ－22	大部分の時間を	人は睡眠と，仕事についやしている。
		Ⅱ－24	調子の良い時	
		Ⅱ－27	私が羨ましいのは	わがままなのに，あまり嫌われない人。
		Ⅱ－29	私が努力しているのは	特にない。努力してると思った瞬間に強制されていることになる。努力するよりも，夢中になれる事の方が大事と思う。

	身体的自己	Ⅰ－27 Ⅱ－９ Ⅱ－15 Ⅱ－20	私の顔 私の眠り 私の頭脳（あたま） 私の健康	は左右非対称だ。 は６時間では少し足りない気がする。 はたぶん理系。 は，今のところ大丈夫。
	否定的自己	Ⅰ－４ Ⅰ－14 Ⅰ－24 Ⅱ－２ Ⅱ－25	私の失敗 私の出来ないことは 私の不平は 私を不安にするのは どうしても私は	は色々あるけど，戻せないし，その時の自分には仕方のなかった事なのだと思う。 鉄棒のさか上がり。 元彼氏。 強制力。誰かに命令される生活は嫌だ。 おどおどしてしまう。
	自己の可能性	Ⅱ－５ Ⅱ－７	もし私が もう一度やり直せるなら	死んだら，意識はやっぱり消えるのかな。 高校生のころからがいい。もっと遊びたい。
	未来の自己	Ⅱ－28	年をとった時	関節と，心臓が心配。
家族関係	家庭	Ⅰ－５ Ⅰ－３ Ⅱ－１ Ⅱ－26	家の人は私を 家の暮し 家では 家の人は	帰りが遅くなると心配する。 を良くする。庭の手入れは少しめんどうだけど面白い。 最近は庭の木を切っている。
	父	Ⅰ－９ Ⅱ－12	私の父 もし私の父が	はすぐ母と喧嘩する。 文句を言う回数を減らせば喧嘩も減る。
	母	Ⅰ－17 Ⅱ－６	もし私の母が 私の母	今後，事故にあったらと思うと心配。 は強引なところがある。妹が勉強しないと怒る
	同胞	Ⅰ－25	私の兄弟（姉妹）	は自称オタクだ。小説やマンガを集めてパソコンで友人と会話する。
対人関係	他人から見た自己	Ⅰ－2	私はよく人から	変わっていると言われる。変わっていない人っているのだろうか。
	対人交流	Ⅰ－13 Ⅰ－20 Ⅰ－26 Ⅱ－10 Ⅱ－11 Ⅱ－23	人々 世の中 職場では 学校では 恋愛 結婚	は誰かを見下して安心している。 は均質化へ向かっている気がする。 元彼氏がストレスをためこんできて，私や友達にありあまったストレスを分ける。 可もなく不可もない感じで過ごしている。 は身勝手だ。相手を目的として見るから，どこかで物と同じ扱いをしている。 はよく分からない。
	対友人	Ⅱ－3	友達	と話すのは，苦ではない。
実存的価値	争い	Ⅰ－7	争い	は，ばからしいからしたくない。相手の行動の理由がわからないと，とまどってしまうから。
	死	Ⅰ－12 Ⅱ－13	死 自殺	は恐いけど，他の生物を殺してごはんにしているから，自分がいつか死ぬのも仕方ない。 したい人はきっとしたいだろうけど，私はしない。
	生活	Ⅰ－15 Ⅰ－18	運動 仕事	不足になりがちなので体によくない。もっと散歩に出たい。 という言葉は言い訳に使われる。知人と約束したら，4時間連絡なしで待たされた。二度と遊ばない。

	家族	Ⅰ－21 Ⅱ－18	夫 妻	
	性	Ⅰ－29 Ⅱ－8	女 男	の子はよくしゃべるらしい。 らしいというのを勘違いするとわがままや横暴になる。
	将来	Ⅰ－16	将来	は自営業をしたい。
	金	Ⅱ－16	金	のしもべになってはいけない。節約してお金を貯めるのは楽しいけど。

Ⅳ　考　　察

1．青年期の発達課題と自我同一性の拡散

思春期に始まる自我同一性の形成の道程は，青年期において一応のまとまりの時期を迎える。この成長過程はすでに乳児期での母親との基本的信頼感や愛着形成に始まる自己形成の到達点でもある。Erikson, E. H.（1975）は，青年期の発達課題について，「自我同一性は，各個人が青年期のおわりに，成人（大人）として役割を身につける準備を整えるために，大人になる以前のすべての経験から獲得していかなければならない一定の総括的な成果である」と述べている。すなわち青年期前期である高校生までに同一化し取り入れられたさまざまな理想的対象を，今一度主体的に選択し直す課題状況となる。そして自分にとり妥当な自己評価と自尊心をもち得るような自我同一性を模索し形成していく成長過程が青年期の発達課題である。したがって青年期のクライアントたちが示す「ひきこもり」という陰性の行動化は，青年期特有のモラトリアム期間での模索行動および対処行動であるとも理解することは心理療法的な視点を提供するものであろう。

一方，青年期までに獲得した理想的対象の同一化群を統合できなく，自己の連続性を見失い社会や大学生活のなかで自分が何者であるかを同定できなくなり，将来の展望と学業や職業選択への意欲を喪失し無気力になる青年や大学生もいる。Erikson, E. H.（1975）は有名な人生のライフサイクルの観点から青年たちが陥るこうした自我同一性の混乱と不全を「自我同一性拡散症候群」として挙げ，下記のように言及している。①社会的自己の選択を統合できなく，自己の連続性を見失い，社会や大学生活のなかで自分が何者であるかを同定できないため，将来の展望と学業や職業選択への意欲も喪失し無気力となる。②過剰な自意識にふけり，万能的で完全な自分を自己愛的に夢見るために，有限で相対的なすべての現実を自分にふさわしくないと思う。③対人的距離の失調。他者にのみ込まれて同一性を喪失するか，あるいはそうした対人関係での不安を回避するため，他者とのかかわりをもてなく回避しひきこもる生活に陥る。④時間的展望の拡散。時間の流れは停滞し生活全体に無気力・空虚感がただよう。⑤勤勉さの拡散。学業への意欲が低下し，勤勉感覚がくずれ，課題への集中不能や自分の好む一面的な活動への熱中を示す。⑥否定的アイデンティティの選択。親や地域社会で期待される役割や同一性に対して軽蔑や嫌悪という低い評価を受ける否定的なアイデンティティの選択をする。

本論で報告した事例Ａ郎およびＢ子の人格にも上述した①～⑥にわたる自我同一性の拡散の傾向を推定できるよう。

2．青年期のひきこもりとスペクトラム

青年期においてひきこもりを示すタイプは下記の四つの群に分けることができよう。①パーソナリティ障害圏の事例群（スキゾイド型・境界性型・自己愛性型・強迫性型・回避性型），②精神疾患および気分障害の事例群（うつ病・対人恐怖・社交不安・不安障害・統合失調症），③高機能広汎性発達障害の事例群，④パーソナリティ障害と精神疾患および高機能発達障害を併せもつ事例群である。従来，ひきこり青年期のクライアントへの援助では精神疾患群には精神医学的治療，パーソナリティ障害群には心理療法，発達障害群には療

育という所謂三分法により対応され勝ちであった。

他方，筆者は（「高機能広汎性発達障害の心理査定法と心理療法」米倉；2007「高機能広汎性発達障害と統合失調症型人格障害との重ね着症候群」米倉；2009「高機能広汎性発達障害とパーソナリティ障害」山岡・米倉；20109）などの先行研究において，パーソナリティ障害と精神疾患および気分障害，ならびに発達障害の重ね着症候群について心理査定法（ロールシャッハ法やＷＡＩＳ知能検査法）と対話心理療法の観点から報告してきた。今後は，心理臨床の実務では，精神医学的治療と心理療法ならびに療育という三分割され治療と心理的援助ではなく，心理臨床家は他職種の専門家（医師・看護師・保健師・教師）との連携と協働で，心理査定法を活用してクライアントの心理アセスメントと心理療法を担うことが課題となろう。

本論で報告した両事例はともにクライアント自身が「アスペルガーではないか」と思い込んでいた事例であったが，上述したように心理査定法の活用による心理アセスメントと専門医師による鑑別診断により事例のアスペルガー障害は否定された。精神疾患であるうつ病・対人恐怖・社交恐怖および強迫性型というパーソナリティ障害と高機能広汎性発達障害との心理アセスメントと鑑別診断が重要な焦点となった事例であった。

ＤＳＭ－Ⅳ－ＴＲによれば，アスペルガー障害では，対人関係において①相互的な非言語交流での顕著な障害がある。②発達の水準に相応しい仲間関係を作ることの失敗。③楽しみ，興味，達成感を他者と分かち合うことを自発的に求めないこと。④対人的または情緒的相互性の欠如を挙げている。

一方，社交恐怖（社交不安障害）では，見知らない対人状況ではつよい人見知りのために不安や緊張感や恐怖を抱くが，乳幼児期から児童期までの友人関係では年齢相応の仲間関係をもつ能力があり，相互的な情緒的相互性は保持されている。事例Ａ郎とＢ子はともに面接初期にはつよい人見知りと対人恐怖や社交恐怖を示していたが，面接中期から後期では面接者との相互的な情緒的交流とともに過去の心的トラウマや家族葛藤について語る内省力により洞察と気づきも得ていった。

３．心理療法の工夫について

本論で報告した二事例はともに対人恐怖と社交恐怖による対人関係からのひきこもりが認められた。当初は心理査定法として導入された描画法やＳＣＴ文章完成法は，Ａ郎の場合では顕著な役割を果たせなかったが，Ｂ子では心理査定法にとどまらず，Ｂ子の内的な想いを面接者に伝達する媒介物となって心理療法を促進した。さらに両者は強迫的で完全主義的な性格傾向をもっていた。

こうした強迫的な観念や確認行動や恐怖を示すクライアントに対して，筆者は田島（1987）が提唱した「壺イメージ療法」からヒントを得て，クライアントに「強迫的観念は湧くままにまかせ棚上げにしておくか，イメージできる壺や箱の中にいったんは入れて置き，取りあえず今するべき行動を第一にするように」と助言した。また両事例に対しては対人恐怖や社交不安で人見知りや視線恐怖をつよく訴え，もっぱら他者からの視線に受動的にさらされるばかりだったが，筆者は自分から相手や状況を見返していくように助言した。

その後，両事例は能動的に他者や状況を冷静に観察し対処する能力を身につけていった。

付　記

本稿は，日本学生相談学会第29回大会（2010年５月21日開催）におけるワクショップで講義した内容を加筆修正したものである。

文　献

American psychiatric Association（2000）
Quik Reference to the Diagnostic Criteria DSM－Ⅳ－TR（高橋三郎ほか訳　2002 DSM－Ⅳ－TR　精神疾患の分類と診断の手引き　医学書院）

Erikson，E. H.（1959）. Identity and the Life Cycle. New York: International Universities.
（エリクソン，E. H. 小此木啓吾 訳　1973 自我同一性　誠信書房）

粥川裕平，北島剛司（2010）．睡眠とうつ病　脳21　Vol.13　No.4　61(419)-68(426)
神田橋條治（2006）．治療のこころ 巻1〜12 花クリニック神田橋研究会
中田裕也，米倉五郎（2010）．青年期におけるひきこもりと自我同一性の拡散　愛知淑徳大学論集　コミュニケーション学部・コミュニケーション研究科篇　第10号　55-70
山岡有沙，米倉五郎（2011）．高機能広汎性発達障害およびパーソナリティ障害が疑われた青年女性との初期面接－ロールシャッハ法・WAIS－Ⅲの検討を中心に－　愛知淑徳大学心理臨床相談室紀要「場としての臨床」，15，51-61
成瀬悟策監修，田島誠一編著（1987）．壺イメージ療法　創元社
山上敏子（2007）．方法としての行動療法　金剛出版
米倉五郎（2005）．対話心理療法と心理査定（法）との統合的アプローチ－心理臨床の各現場における面接技法の工夫－　愛知淑徳大学心理臨床相談室紀要「場としての臨床」，9，3-8
米倉五郎（2007）．高機能広汎性発達障害の心理査定法と心理療法　愛知淑徳大学心理相談室紀要「場としての臨床」，11，23-37
米倉五郎（2009）．高機能広汎性発達障害と統合失調症型人格障害の重ね着諸侯群－ロールシャッハ法からの一考察－　愛知淑徳大学心理臨床相談室紀要「場としての臨床」，13，11-25